

区外に刻まれた区の歴史②

草創期の浄閑寺

―八千代の仏像修理銘が語るもの―

です。

三ノ輪のお寺といえば浄閑寺。板碑に追刻があるのを思い出し、浄閑寺の寺伝や『あらかわの板碑』等の報告書をご案内しました。

区登録有形文化財・浄閑寺の板碑 南千住2丁目の浄閑寺には、正和2年(一一三三)11月銘の板碑があります。この板碑には、線刻の日月が彫られています。もし、これが中世のものであれば、全国の板碑の中で最古の日月例となります。ちなみに、日月の初見は室町時代とされ、日待・月待等の供養板碑に施されるものと考えられています。浄閑寺の板碑は、阿弥陀の種子一尊を刻んだ鎌倉末期の板碑であり、また江戸時代の延宝3年(一六七五)に追刻があることから、日月は江戸時代に彫られたと解釈されてきました。この板碑への関心は、日月が彫られた時期に終始していたというのが正直なところです。

今回の報告は、追刻された銘文に関するものです。板碑の表面には「松誉南貞・浄誉妙清・貞順信女・迎誉按意・妙寿信女・心誉清月・華理信女・順誉順誓・貞寂童女」他一名の戒名、裏面には「生国摂州大坂幾玉之住、奥田氏松誉玄清、延宝三乙卯年五月廿九日」と追刻されています。

きつかけはレファレンスから 平成19年夏、千葉県八千代市の方から「三輪村の霊吟寺」という寺を探しているというお問い合わせを受けました。八千代市村上の正覚院本尊の木造釈迦如来立像(千葉県指定文化財)の延宝2年霜月の修理銘札に「願主武州三輪村霊吟寺門弟願誓貞故、厨子扉の墨書に「武州江戸三輪村霊吟寺 願主願誓貞故」とあるそうで、仏像の



浄閑寺の板碑 (拓本)

報告書持参で、該当するお寺を探しに来られたとのことでした。

正覚院とは真言宗豊山派の寺で、本尊は京都の清涼寺のお釈迦様を模した鎌倉時代の仏像だそう

それから、2年後の平成21年夏、八千代市立郷土博物館で同仏像の展示会が開催されるということで、再度調査することとなりました。延宝2年の釈迦如来立像の大修理には「武州三輪村霊吟寺門弟願誓貞故」が大きく関与していたと考えられます。修理の際に首柄に書かれたと推定される墨書には「松誉玄清 南無阿弥陀仏」、同院蔵の絹本墨色地藏菩薩像の墨書には「松誉玄清奥田氏菩提之為」とあり、浄閑寺の板碑の裏面銘の戒名と同一であると思われま

浄閑寺II霊吟寺? さらに「浄閑寺過去帳」(区指定有形文化財)の冒頭にある歴代任職中に「二世聲連社念誉上人願誓・故・霊吟和尚 延宝二甲寅歲正月廿九日 十四年」(傍点筆者)と見えます。浄閑寺の開山は、寺伝では明暦元年(一六五五)と伝えますが、寛永6年(一六二九)に開かれたという史料もあります(元禄9年(一六九六)「浄土宗寺院由緒書」『増上寺史料集』第7巻)。初代任職は天運社晴上人随行順波。寛文元年(一六六一)に没し、二世願誓霊吟がこれを継ぎました(「浄閑寺過去帳」)。このことから「三輪村霊吟寺門弟願誓貞故」の「霊吟寺」には、二世の名で浄閑寺のことを呼んだ可能性が考えられます。また、「門弟願誓貞故」の戒名は二世「願誓故霊吟」の「願」「故」を通字にしているとも考えられ、霊吟について出家したものと推測されます。

釈迦如来立像の厨子扉の銘や「池証山鴨齋寺正覚院縁起」によると、願誓貞故が願主となり、正覚院がある村上や江戸の人びとの喜捨により、仏像の修理が叶ったとあります。

また、正覚院に後世に持ち込まれたと思われる寛文13年銘半鐘には、願誓貞故が願主となり清誉浄真と妙園が結縁し、念仏講中の逆修のため造ったと記されています。正覚院の近くにある延宝6年銘「三界萬霊塔」(無縁仏を供養する石塔)にも、この3人の名前が刻まれているそうです(<http://sanpoboku.com/>)。

ところで、願誓貞故に関わる江戸の人びとが、遠く離れた寺院の仏像の修理に寄与するには、どういった背景があったのでしょうか。ひとつには願誓貞故らが、他の地域でも、勸進による仏像や造塔等の修理・建立を行っていて、これら事例はその中のひとつであるという可能性が考えられます。また、願誓貞故を取り巻く人びとが、生業などで、江戸時代の八千代市の人びとと何らかの関係を持っていたことも検討しなければなりません。いずれにしても、江戸時代の追刻のある板碑が、草創期の浄閑寺の動向を窺う上で貴重な資料であることが明らかになりました。今後の調査に乞うご期待! (野尻かおる)

【参考文献】『あらかわの板碑』(荒川区教育委員会、一九八六年)、『正覚院の修理報告書』(八千代市教育委員会、一九八一年)、『正覚院展』(八千代市立郷土博物館、二〇〇九年)



木造釈迦如来立像 (正覚院)